



News from TNU

## 短期派遣報告：天津師範大学三重大事務所のことなど

英語教育講座 教授 宮地信弘

2014年9月7日から19日まで短期派遣教員として天津師範大学で集中講義を行った。10年ぶりに天津師範大学を訪れてその変化に驚いた。到着した日の夕方近く構内を散歩したが、昔日の姿は見出し難く、新キャンパスへの移転後、ここ八里台キャンパスに残った学内ホテルとその向かいの「教育中心大楼」、そしてその二つの間にある会議棟の3棟の建物のみが昔を思い出すすがであった。「去年の雪、いま何処」の感を抱いた。

私が担当したのは「日本語・日本社会Ⅰ」という3年生[第5期生(正式2期生)]対象の授業で、全く専門外の授業内容なので大変戸惑ったが、ビデオ・アニメ・マンガ・TV番組等の視聴覚教材や統計資料などを利用して、私にできる範囲で日本社会について理解を深めることを念頭において授業計画を建て、何とか無事に乗り切った(と思う)。13日間の滞在中には多くの先生にお世話になった。特に東先生と川本先生のお二人には生活面から授業に関することまで実にいろいろな面で助けてもらった。記して感謝申し上げたい。私の短期派遣に関する報告は以上で終わりである。

到着翌日(9月8日)、長期派遣教員として滞在中の東先生に案内されて三重大事務所(教育中心大楼7階の一部屋)に入った。この事務所があることは知っていたが、中の様子を見るのは初めてであった。中に入ると、左の壁面一杯に設えられた本棚に岩波新書・文庫本・DVD・日本および日本語関係の書籍がずらりと並んでいる(浦沢直樹の『20世紀少年』もあった)。現在、岩波新書は1,242冊、それ以外の書籍は1,374冊あるという(DVDは226枚)。右手にはテレビ・コピー機のある一角に次いで、『国語大辞典』『日本史大辞典』『資料日本教育実践史』等が入った木製ガラス扉のキャビネットがあり、隣にはテープレコーダーやチョークなど普通の授業で用いる教具が置かれた台、その上の飾り棚には扇子等の日本文化関連品が飾ってある。さらにその隣には、二つのガラス扉のキャビネットがあり、その一つには日本語班学生の卒業論文ファイルや授業関連ファイル、日本語教授法関連図書と辞書(やはりここにも何故か

漫画『ごくせん』)が収められ、もう一つには箱入り『日本文学全集』収められている。中央には8人がけのテーブル、その上には文房具やファイル、メモ用紙等が置いてあり、簡単な作業ができるようになっている。窓際には机2台が向かい合って置かれ、それぞれにパソコンと共有のプリンタが設置されている。コーヒーなどの飲み物もあり、授業の休憩時にはここでつるげるようになっている。



三重大事務所：キャビネットの前に立たれる東先生

この事務所の日本語関連図書の充実に腐心されているのは東先生だ。書籍代として三重大から毎年5万円が支給されているが、それだけでは間に合わず、日本へ帰国される度にブックオフで古本を自腹で購入され、図書の充実をはかっておられるということであった。天津に来るときには毎回スーツケース2つにそれぞれ重量制限の23キロを超えないよう重さを計って書籍を詰め込み、更に大量の本を入れたバックパックを背負って機内に持ち込まれているそうだ(一瞬、戦後食糧難時代の買い出し風景を連想した)。加えて、ここには教授用として東先生が独自に編まれた閲読用参考テキストもあり、これまでに4種類ほど作成されている。そのテキスト作成に必要なパソコンへの入力作業で網膜剥離になり、あわや視力を失いそうになったというお話を伺った。現在は、学生のために『漢字総合練習帳』を起案されており、その計画書も見せてもらった。

東先生が図書の充実に努力されておられるのは、もちろん日本語班の学生のためである。彼らが日本語能力を身につけてくれることを願ってのことである。この本は、右手のキャビネットに入った閲覧のみ可能な書籍以外、学生の借り出しは自由で、岩波新書その他の書籍はすべてエクセルファイルに登録されており、そのファイルは学生にも渡されているということである。私が授業後に休憩している時も日本語一級試験(7月実施)に合格した学生が『吾輩は猫である』を借りていった。借り出す際には貸出簿に氏名等を記入することになっているが、その貸出簿を先生は「宝物」だと言われた。日本語習得の勉強過程を示す貸出簿が「宝物」なら、その勉強の集大成である卒業論文ファイルは「大宝物」だろう。砂埃がかからないようにキャビネットに大切に保管されているのも宜なるかなと思う。



三重大事務所：入ってすぐ左の書棚

日語班学生の一人ひとりを心にかけておられる先生は学生の卒業後の進路にも心を配られている。短期派遣が終了して帰国後しばらくして東先生から「八里台通信」第5号が届いた。副題に「天津師範大学・三重大学合作併学日語班ネットワーク」とある（私は国際交流委員会委員でありながら、5号を頂くまで「八里台通信」のことを知らず、自分の不明を恥じた）。第5号は「近況報告大特集号」となっており、「本号では、三重日語班の第一期生から第六期生まで、120名の内、106名の方から、近況、感想、将来への夢などを自由に日本語でつづった玉稿をいただきました」と書かれている。先生が一人ひとりに連絡を取ってそれに答えた卒業生・在学生たちの近況が27ページにわたって綴られている。読んでみると、日本で就職している者もいれば、中国に戻って日系企業に就職している者、海外勤務している者、大学院で学んでいる者などいろいろな進路をたどっている。かつて私が担任した1期生は日本語通訳の仕事

についた後、結婚して今は2児の母となっており、もう一人の2期生は日本企業で働いていることを知り、懐かしくなった。寄稿した卒業生たちの文章が日本人と見分けがつかないくらい自然で巧みな日本語で書かれていることにも一驚した。

天津DDプログラムは普段私たちが意識することのない長期派遣の先生方の不断的努力によって支えられている。年に数回書籍の買い出しに帰国される東先生たちの努力の着実な成果は、日本語を使って各分野で活躍している卒業生が証明している。  
—— Tree is known by its fruit. (木はその実によって知らる)

東先生は2009年9月から長期派遣として天津師範大学で教えられ、2014年9月で丸5年が過ぎ、現在6年目に入られた由。私の滞在中、先生は天津で外国語教育に尽力した外国人ということで天津市長から表彰された。天津師範大学からは東先生のみが選ばれたとのことであった。



## 天津出張報告——集中講義は理系もOK！——

社会科教育講座 教授 秋元ひろと  
理科教育講座 教授 伊藤 信成



秋元先生 授業風景

秋元（11月16日から25日）と伊藤（11月19日から28日）の二人は、ほぼ同じ時期に天津師範大学を訪れ、三重大学とのDDプログラムの学生を対象とした集中講義を実施してきました。長期滞在中の東先生、師範大学の馬先生と4人で「御徒町」探索に出かけるなど楽しく有意義なそれぞれの10日間となりました。

秋元の担当は4月に来日予定の3年生20名で、科目は「日本語と論理的表現」。天津での集中講義はこれで4度目。今回はこれまでになく熱心に取り組んだ結果、帰国後に仕事を持ち越すことになりましたが（婉曲表現）、教育的配慮という観点からすると、またプログラムの今後のためにもよかったのではと思っています。ここでバトン・パス。

伊藤の担当は2年生18名に対する「日本語・日本文化」でした。天津での集中講義は初めてでしたし、理系教員としても初めての集中講義ではないかと思えます。これから集中講義に行かれるであろう理系の先生方の参考になればと思いますので、少し詳しく報告します。…ことの起こりは今年度最初の頃の国際交流委員会。「学部全体での取り組みなんですから、理系教員の方にもご協力をお願いすべきですよ」との発言をした委員がおりました。私（伊藤）です。その際は“そうは言っても理系の教員は無理だよ”と内心思っていました。が、“じゃあ、言いだしっぺの伊藤さんから”という委員長の一言で天津行きの手

ケットを手配することになったのです。しかも担当は「日本語・日本文化」。M岡先生はD.キーンを10ページでギブアップした私に日本文化の何を語らせようというのでしょうか！ともあれ理系っぽく、まずは定義を押さえます。大辞林（第三版）によれば文化とは「学問・芸術・宗教・道徳など、主として精神的活動から生み出されたもの」とのこと。よっしゃー！日本語で学問の話をしたら「日本文化」だよと我田引水の理屈でテーマを考えることにしました。とは言え、日本語を勉強する学生に相対性理論の話をするほど空気が読めない人間でもないの、テーマとして「月」を取り上げることにしました。具体的には

- ・月の呼称と月出時刻：日本の月の呼称は月の出時刻と関係しているよ。
- ・もしも月がなかったら：月がないと潮の干満が小さく、きっと人類は誕生しなかった。
- ・月と和歌：柿本人麻呂の「東の～」に歌われた月の形。蕪村の歌も取り上げる。文学の話はなし。
- ・和歌つながりでカルタ：ちょっと強引だったか。
- ・望遠鏡の組み立て：日本語の説明書を読みながら小型望遠鏡の組み立て。月を見てみよう！



伊藤先生 野外授業

以上のような内容で行いました。今回集中講義を行った2年生は、三重大学教員による集中講義が初めてとのことで、お互い最初は緊張しましたが、同じ人間。共通の話題があれば打ち解けられます。大学院生にもなって漫画かよと言われた時もありましたが、『スラムダンク』（井上雄彦氏による高校バスケット部を題材にしたマンガ）を読んでいて本当に良かったと思いました。学生は熱心に聴いてくれましたし、私の質問にも一生懸命答えようという姿勢は見受けられました。はたして「日本文化」の話になっていたのかわかりませんが、最後にはケンタッキーで私に代わって注文してくれるくらいには打ち解けることができました。

また、集中講義とは直接関係しませんが、前回は3年前には工事中だった地下鉄が開通しており、非常に便利でした。また前回ははしょぼかった科学博物館がリニューアルオープンしていて個人的には楽しめました（博物館で3時間も費やすとは思わなかったとは、ガイドを務めてくれた天津学生さんの弁）。

最後に、天津滞在中は東先生、川本先生、師範大学の先生方に大変お世話になりました。おかげさまで不自由なく天津生活を過ごすことができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

次回は月が綺麗な時期に訪れたいと思います。

## オークランド 大学教育研修

### ニュージーランドで学んだこと

教育学研究科人文・社会系教育領域 社会科教育部門2年 小林 司

オークランド研修では、参加者一人ずつホームステイをしながら、オークランド大学に通い、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学の授業に参加、見学をしたりしました。

ニュージーランドの教育を説明するならば3つの特徴が挙げられます。一つ目は、子どもが主体ということです。具体的には、小学校一年生の授業の見学をさせていただいたときに、子どもたちがみんな積極的に手を挙げたり、週末何をしたのか一人で発表をする機会があったりしました。また、全ての授業で教科書を使わず、各学校や教師によって子どもに合った教材を作って授業を展開されていたのが印象的でした。オークランド大学教育学部の講義でも、算数の問題でさえも、グループで一緒に考え、それを発表するといった学生の自発性を促す教育を行っていました。

二つ目は、先住民をはじめ世界から多くの文化が共存しているということです。幼稚園では、英語を話す子どもとマオリ語を話す子どもが共に学んでいました。中学校では、マオリ族のアートなどを用いた作品を作っていました。また、中学校で、日本語を学べるクラスがあり、そのほかにも色々な言語を学べるクラスがありました。自国独自の文化を大切に扱い、また、多文化について積極的に取り組んでいることが印象的でした。

三つ目は、パソコンやタブレットを使いこなしていることが当たり前となっていたことです。ホストファミリーの6歳の子どもが毎日パソコンを使った宿題を親と共にしていたり、中学校の社会の授業では、生徒がタブレットを使って、グループで雑誌を作ったりといった活動を行っていました。

オークランド大学教育学部における教育研修は、2011年より始まった海外教育研修プログラムです。第4回目（今年度）は9月1日～11日に実施されました。参加学生は14名で、引率には後藤太郎先生、佐藤年明先生、永田成文先生、荒尾浩子先生および小河久美さん（三重CSTサポート室）があたりれました。主なプログラムとしてオークランド大学での講義（「多文化教育」「NZの教育事情」「TESOL」「早期教育」等）と授業参観（「理科教育」「音楽教育」「体育」「リタラシー教育」等）の他に、オークランド大学生との交流やニュージーランドの幼稚園・小学校・中学校・高等学校の視察と授業検討会などがあり、充実した研修となりました。



ニュージーランドの学校の授業風景

この11日間の研修でニュージーランドの教育観や多文化共生観を学ぶことができました。更に、現地の児童生徒や先生方との交流ができるといった機会を持つといった内容の濃い体験ができました。ここで学んだことを春から始まる教員生活に生かしていきたいです。

## Tri-U IJSS

### 真の国際交流とは—Tri-U 国際ジョイントセミナー&シンポジウムに参加して

教育学研究科人文・社会系領域 英語教育部門1年 小塚由紀

私は11月2日～11日にタイで開かれた第21回 Tri-U 国際ジョイントプログラムに参加した。簡単に参加したと言ってしまうが、私には他の学生と大きく違う点がある。アラフォーのママ学生だということだ。母親が10日間も抜けた核家族はいったいどうやって暮らすのか。まず、このプログラムに参加するにあたって第一関門がこの問題であった。ところが、夫はいとも簡単に「行けば～」と言ってきたのである。これには私自身が驚いた。応募して、面接を通り、いざ代表として参加が決まった頃から出発までの数ヶ月間、私は何度辞退しようと考えたことか。それでも、夫は「なんとかなるっしょ」という具

第21回 Tri-U 国際ジョイントセミナー&シンポジウムが11月2日～6日にチェンマイ大学（タイ）で開催されました。アジアを中心に13大学から100名を超える学生・教職員が参加しました。“What Can We Do for Asia Sustainability”という全体テーマのもと、熱心な研究発表やワークショップが行われました。三重大学からは15名の学生（教育学研究科からは1名）が参加し、その内の1名は Best Presentation Award を受賞しました。今年度の三重大参加者は5日間の Tri-U の日程を終えた後、場所をタマサート大学に移し、そこを拠点にタイ・フィールド・スタディにも参加しました。国連の専門機関の一つである FAO (Food and Agriculture Organization) を訪問するなど、多くのことを学んで帰国しました。

合(ちびまるこちゃんのお父さんを想像してください)だった。私は夫のあっけらかん発言に、むしろ完璧な準備が必要だと痛感し、出発までに、子どもたちの1週間のスケジュール、登園に必要な持ち物などあまりにも詳しく自分で笑ってしまうほどに完璧な表をこしらえ、壁に貼ってから、11月2日の朝晴れてタイに出発したのである。

さて、日本を離れてしまえばこっちのもの。私は母親業から離れ、羽を伸ばした。ここからが本筋のタイでの話だが、まずチェンマイはとても魅力的な町で、ロイカトーンという一年で一番神秘的なお祭りにも参加した。今年ホスト校を務めるチェンマイ大学の学生は誰もが親切で、困ったことがないかと親身に話しかけてくれた。論文発表では、各国の各大学から選りすぐりの秀英学生が集まっていたこともあり、プレゼンの仕上がりが具合は誰もかれも優れていた。中国の学生は1分1秒を正確に仕上げ、インドネシアの学生はパフォーマンスまでキッチリ、これはTEDか?と思う学生もいた。



論文発表の様子

ところで、英語は上達したかという問題について、幸運にも、私は英語以上の体験をしてもらった。英語に関しては論文発表とそれに続くグループワークでは非常にいい刺激を受けたが、現地の人たち

には私の英語が通じなかった。英語科の私の英語が通じないとはいどういうことか?例えば、滞在していたホテルのフロントにクリーニングを頼んだ時。”Could I have the laundry service, please?”と最も丁寧な表現を使ったが、全く通じず、そこからブレイクダウンしたところ20分。結局ジェスチャーで理解される。さらに、チェンマイでのTri-Uプログラムが終了し、その後バンコクでフィールドスタディにも参加したのだが、タイで評判の高いタマサート大学の学生寮に宿泊することになった。世話係の学生は、私が英語を話し出した途端にふっと笑って横を向き、英語を聞いてくれない。どういうことだ?なぜ、通じ

ない?と思いきや、突然「アナタ、ナンジ、オキマスカ」と日本語で返した。これこそ、The 国際交流なり。英語ができるからといってエバっていた私をこの瞬間ノックアウトしたタマサート大学生。あっちが日本語で来るなら、私はタイ語でやるしかない。彼女たちの寮にお世話になった3日間に私のiPhoneのメモパッドはタイ語でいっぱいになったのは言うまでもない。ある朝、学生寮にコモドラゴンが出現し、私は感動のあまりカメラを構えて近づいた。その時背後で「ユキサン、アブナイ!」と正しい日本語が爆発し、私は世話係の彼女に叱られてしまった。近づくことは、かなり危険行為だったらしい。命の恩人の彼女からは「ゲンキデスカ?タイ、マタ、クルネ」と今でもメッセージが来る。

三重大から参加したのは15人。このメンバーとは家族のような仲間意識が芽生え、今でも仲良くしていただいている。私以外はもちろん20代前半の学生たちだが、この中で私が体力的に一番タフだったと感じる。これも、常に時間に追われる母学生の習慣的賜物なのかもしれない。真の国際交流を知り、国際舞台で論文発表の機会を与えていただいた三重大のこのプログラムに感謝してもしきれない。(私の留守中にかなり苦労したらしい夫の協力にも感謝である。)一人でも多くの学生がTri-Uに挑戦し、楽しく痛い(笑)体験をしてくれればと思う今日この頃である。



タマサート大学学食にて

## 留学生報告

## カナダで得られた可能性

教育学部英語教育コース4年(63期) 渡邊将人

僕は9ヶ月間カナダに留学していました。僕がカナダへの留学を決心したのは、実際にネイティブの話す英語に触れてみたいという気持ちがあったのと、海外で感じることでできるカルチャーショックを体験したいと思っていたからでした。

はじめの3ヶ月はバンクーバーの語学学校でいろんな国から英語を学びに来た人達と、主にコミュニケーションスキルを学習しました。そこではあまり英語を第一言語とする人とは知り合いになることができませんでしたが、いろんな国の人達と友人になることができ、日々異文化を体験することができました。



スクールのアクティビティ(右から4人目が渡辺くん)

しかし、やはりもっとネイティブスピーカーとのコミュニケーションの機会を増やしていきたいと思い、地方に移動して、ホテルでハウスキーパーとして働き始めました。そこはもちろん仕事で英語の使用される環境で、英語力の上達にはとてもいい環境でした。働くうちにネイティブの友人もたくさんできて、彼らの考え方や生活スタイルに驚かされつつも、非常に興味深く感じている自分がいて、毎日が本当に楽しかったです。

今回、自分の英語力を確かに向上させることは出来たと思います。しかし、まだ学ぶところは多いとも思うので、高いモチベーションをもって、学びを続けていきたいと思っています。また、海外で出会うことのできた友人と過ごしたこの9ヶ月間は何よりの財産です。今でも彼らとは連絡を取り合いますし、彼らの文化を学び、そしてまたこちらが日本の文化を伝えるということにとっても充実感を覚えます。

海外留学は大変なイメージがあるかもしれませんが、しかし、一步を踏み出してみると、そこからまたいろいろなもの・ことが見えてきて大変大きな自身の成長につながると確信しています。また、英語を学習することでより多くの人と興味深い話ができるようになり、一部の異文化を知ることができました。海外で得られたこれらの経験や自信は、これからの自分にとってプラスになる、そう実感しています。